

# 美濃金山城跡の再検討

—発掘調査成果から「天守」を考える—

柴田慎平／佐藤佑樹／松原草太

掛川市役所・滋賀県立大学大学院人間文化学研究所博士前期課程修了  
 ／滋賀県庁・滋賀県立大学大学院人間文化学研究所博士前期課程修了  
 ／静岡市役所・滋賀県立大学人間文化学部卒業

## はじめに

本稿で取り上げる美濃金山城跡は、岐阜県可児市兼山字古城山一帯に立地する(以下、金山城跡と記載)(図1)。古城山山麓の北側から西側にかけて木曾川が流れ、その流路に沿って形成された木曾川舟運の一拠点である兼山湊を取り込む形で城下町(金山城下町遺跡)が展開している。また、城跡の南側を東西に東山道が通るなど流通、交通路を意識した選地であり、森氏(可成、長可、忠政)が城主を務めた織田・豊臣期には、東美濃支配における拠点として機能した。



図1 金山城跡位置図

金山城跡は、主郭を中心とした12の曲輪と山麓の米蔵跡とで構成されている(図2)。自然地形を生かした戦国・織豊期の土木技術の痕跡(礎石建物や石垣)を今に伝えている点、廃城後の改変が少なく、慶長期における城破りの状況が明瞭に分かる点などが評価され、平成25(2013)年に国史跡に指定された(可児市教育委員会編2013)。

さて、金山城跡といえば、天守をはじめとする城

内の諸施設が犬山城に移築されたとする「金山越」の是非がクローズアップされてきたと言っても過言ではないだろう。これまで「金山越」の検証を目的とする調査・研究が進められ、様々な見解が示されてきている。しかし、そもそも検討するに足る資料が少なかったという点が大きく影響してか、研究者によっては異なる見解が示されるという状況にあった。

そのような状況のなか可児市は、あくまで城跡の整備を第一義とし、天守の有無並びにその構造について考古学的に検証することを1つの目的として、平成29(2017)年から滋賀県立大学と合同で発掘調査を開始した。調査では、天守台と目される遺構を検出するなどの成果を挙げており、調査成果を反映した『美濃金山城跡主郭発掘調査報告書』(以下、『報告書』と記載)を令和2年度末に刊行している(可児市・滋賀県立大学編2021)。

ただ、『報告書』においては紙面の都合上、調査成果の事実報告が中心となっている。そのため、金山城跡の天守をめぐるこれまでの調査・研究や『報告書』上で「天守」<sup>(1)</sup>と想定した過程、中井均氏が『報告書』の総括において犬山城への天守移築を否定した経緯について詳しく触れられていないのが実情である。

そこで本稿では、天守をめぐるこれまでの調査・研究と発掘調査成果を改めて整理し、金山城跡の「天守」について再検討を試みる。また、「金山越」に関する問題については、金山城跡並びに犬山城の発掘調査で明らかとなったことを踏まえつつ、金山城跡に関係する資料を中心に検討を行いたい。

## 1. 天守をめぐる調査・研究史と問題の所在

本章では、金山城跡の天守をめぐるこれまでの調査・研究のうち、代表的なものを挙げながら、問題の所在を明らかにしたい。なお、金山城跡の歴史、構造、年代観などに関わる内容については、『金山城跡発掘調査報告書』(可児市教育委員会編2013)と『報告書』(可児市・滋賀県立大学編2021)に詳述しているため、そちらを参照されたい。

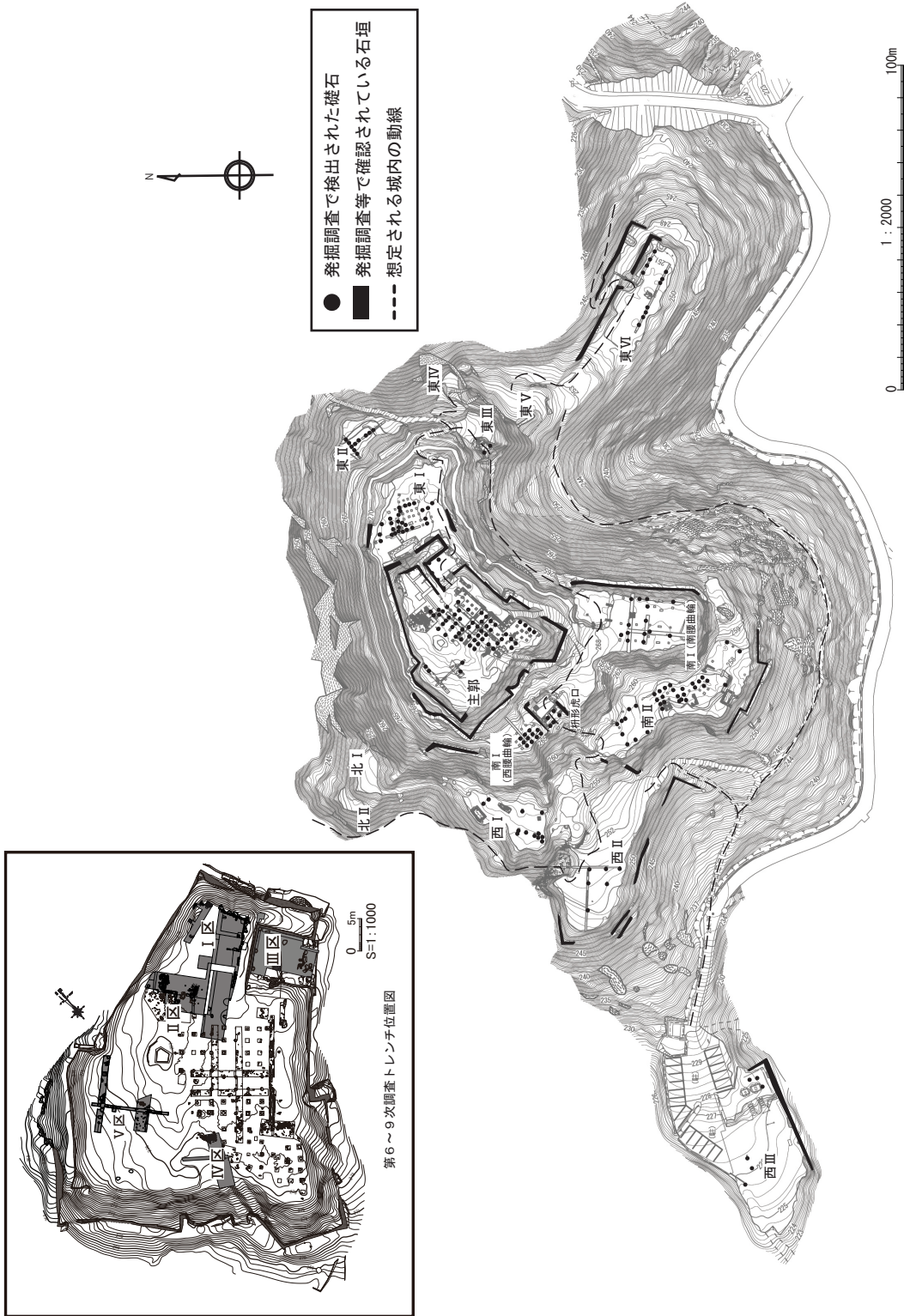


図2 金山城跡山上部全体測量図

(1)土屋純一・城戸久氏による調査・研究

天守をめぐる調査・研究の端緒となるのは、土屋純一・城戸久氏が行った検討である(土屋・城戸1937)。両氏は、犬山城の構造と建築年代を考えるにあたっては「金山越」の検討が必須であるとし、昭和10(1935)年12月に金山城跡の「實測調査」を行ったとする。論文には調査の成果として、「美濃金山城跡見取圖」と「美濃金山城跡頂上附近(=現主郭)実測圖」(図3)が掲載されており、主郭東端部に天守が想定される範囲を示している。

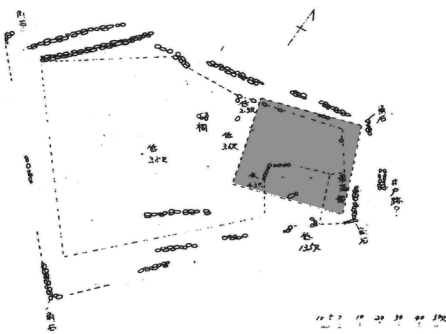


図3 土屋・城戸氏による天守想定案

土屋・城戸氏が行った天守の範囲復元は、主郭の外に面を向ける「石壘(=石垣)」のうち「東側石壘線」を基準として、犬山城天守の「初重平面」を重ね合わせるという方法を採用している。また、現在は主郭枅形虎口と評価されている箇所を天守の「穴蔵」と想定し、範囲に含める形で復元を行った。さらに『金山記全集大成』に基づいて、金山城天守の建築年代を天文6(1537)年と想定し、犬山城天守の二重目までの建築年代の根拠とした(土屋・城戸1937)。

このように天守移築説を軸とする「金山越」に肯定的な見解を示していた城戸氏であるが、昭和36(1961)年4月から昭和40(1965)年3月にかけて行われた犬山城天守の解体修理工事の成果を踏まえ、移築ではなく天文6(1537)年の時点で今の位置に創建されたと見解を変更している(国宝犬山城天守修理委員会編1965、城戸1965)<sup>(2)</sup>。この金山城からの天守の移築を否定する見解については、西和夫氏も同じ立場である(西1977)。

(2)兼山町が主導した調査

昭和41(1966)年4月から兼山町文化財委員会、

兼山町教育委員会、兼山町誌編集委員会が中心となり、主郭部の発掘調査が行われている。この調査において、主郭南西に長さ10m、高さ1.9mの「大石壘」が発見され、その他にも主郭中央部で礎石、「穴蔵(現枅形虎口)」の入口とみられる「石段」(枅形虎口南東隅)や「土台石」などが確認されている(鳥羽正雄ほか編1967)。

この調査の際に、土地家屋調査士の飯田格瑛氏が調査成果をまとめる形で作成したのが「濃州金山城趾実測図」である。飯田氏も土屋・城戸氏と同じく主郭東端部に「天守」を想定し、現枅形虎口南東部のみ石段が確認されていることから、天守に伴う方形の「穴蔵」であると評価した。また調査では、主郭北側に拳大の円礫が敷き詰められた「石畳」と「四、五個の礎石らしきもの」、「天守北面石壘西北隅の隅石と思われるもの」が検出されており、天守西面の推定ラインを考える根拠としている。

その後、根津袈津之氏が発掘調査現場を訪れ、「天守及び天守下段に付櫓を構え、この付櫓に接続して長く西に延びた袖櫓が存在したであろう」との見解を示した(図4)(根津1967)。

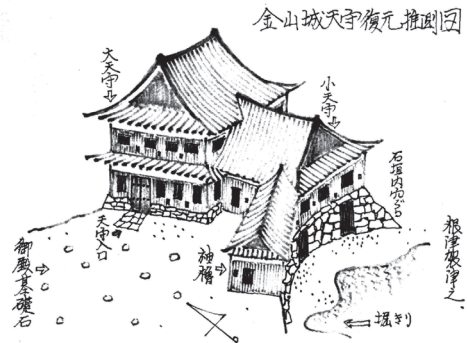


図4 根津氏による天守復元案

こうした根津氏の見解やその後の発掘調査の成果を基に作成されたのが「金山城趾本丸趾推定平面図」である(図5)(兼山町史蹟保存会編1973)。主郭のうち烏竜神社本殿及び拝殿(現在は山麓に移転)部分に「天守」(主郭外周石垣の根石を基準として東面21.3m、北面19m、南面17.2m、西面16.4mと復元)これに付随する「穴蔵」を持つ「小天守」と「袖櫓」、主郭中央部に「本丸御殿」、主郭南西部に「南西隅櫓」といった施設の存在を想定している。



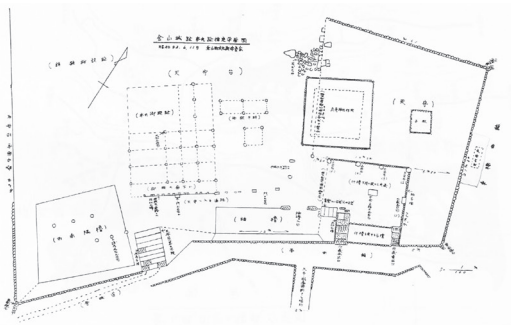


図5 兼山町による主郭想定案

金山城跡の調査成果は『兼山町史』や『史蹟美濃金山城跡』（兼山町史蹟保存会編1973）にもまとめられ、主郭東端部に天守を想定する見解は、広く一般に認識されるに至った。また、荒井金一氏が作成した「金山城跡めぐり道程概説」、「美濃金山城郭推定略図」（兼山町史蹟保存会編1973）にも成果が反映されており、特に曲輪呼称は現在においても広く使用されている。

(3)横山住雄氏の研究

兼山町が主導して行った発掘調査の成果を基に、「金山越」を積極的に肯定する立場で研究を行ったのが横山住雄氏である（横山1979）。横山氏は天守移築説を否定する『国宝犬山城天守修理報告書』の記載内容に疑義を呈しつつ、逆に移築説を肯定する根拠を挙げながら論を展開している。詳細については、横山氏の論考（横山1979）に譲るが、横山氏が移築を肯定する根拠を簡単にまとめると、

- ①諸史料を丁寧に精査すると「金山越」を肯定する記載となっていること。
- ②金山城跡の「天守」想定箇所（主郭東端部）と犬山城天守の平面図を重ね合わせると整合する（図6）。

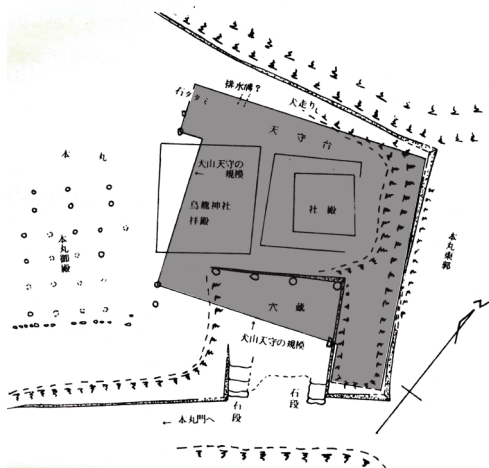


図6 横山氏による天守想定案

- ③金山城跡出土の軒丸瓦と犬山城出土の軒丸瓦を比較したところ、材質、焼成状況、文様が一致する。
- ④金山城跡・犬山城では、桐文をあしらった瓦が出土している。犬山城の歴代城主の中で、桐文瓦を使用して建物の葺き替えをしたとする城主は確認できないため、移築の際に付随したと想定できる。
- ⑤犬山城天守下層部の使用材が、金山城跡付近に生えている樹種をよく反映している。
- ⑥犬山城天守の番付が1つしか見られないのは、金山城天守の創建が天文年間ではなく天正年間と想定されることと、犬山城天守下層と上層に同じ番付が用いられていることで説明がつく（=城戸氏の説は成り立たない）。
- ⑦移築の際に元の釘穴に釘を打ち込んだとすれば、釘穴が1つであっても問題はない。

以上の7点となる。こうした横山氏の一連の検討によって、天守移築説を軸とした「金山越」肯定論の概枠が固められ、広く一般に認識されるに至ったと言えよう。

ただし、横山氏の論には、城戸氏からの反論がある（城戸1981）。城戸氏は横山氏が挙げている根拠に対して一つ一つ意見を述べているが、特に⑦に対しては「このような施工方法は、不可能に近いものといわねばならない」と強く否定している。

(4)高木鋼太郎氏の研究

前項に挙げた横山氏の論を発展的に継承する形で、近年精力的に研究を行っているのが高木鋼太郎氏である（高木2018、高木・飯田2020）。高木氏は、横山氏と同様に『国宝犬山城天守修理報告書』の記載内容について再検証すべき点が多いと指摘し、可見市教育委員会が行った金山城跡の発掘調査成果（可見市教育委員会編2013）を踏まえながら「金山越」の是非について再検討を試みている。

高木氏の研究において特筆される点は、天守の平面規模を比較するに際し、金山城跡主郭部の3次元的な復元を試みている点であろう。さらに高木氏は、主郭外向き石垣の「輪郭」を復元した上で犬山城天守の一重目平面を重ね合わせ（図7）、「穴蔵」の部分も含めておおむね整合するとの見解を示している。

(5)高田徹氏の研究

以上の研究では、おしなべて天守の位置を主郭東端部に比定している。これに対して、金山城跡の縄張りという視点から天守の位置の検討を試みたのが



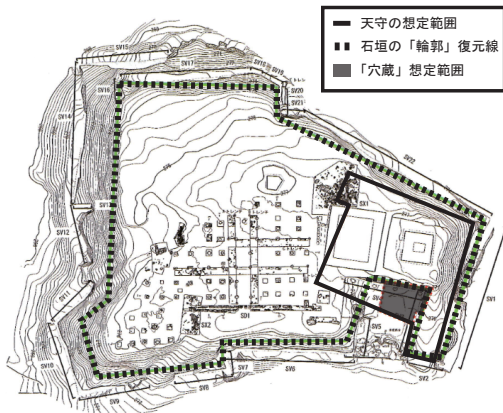


図7 高木氏による天守想定案

高田徹氏である(高田1993)。

高田氏は、これまで天守の「穴蔵」と評価されていた箇所は明らかに「枡形虎口」であろうとし、「犬山城天守台との類似性は全くの偶然に過ぎない」と述べている。ただ、「他の織豊系城郭の例から考えても金山城にも天守が存在した可能性は高い」とあわせて指摘しており、城下を臨む主郭北西隅または、主郭へのルートを押さえる主郭南西隅と考えるのが妥当であろうと想定している<sup>(3)</sup>。

#### (6)問題の所在

第1項から第5項において、金山城跡の天守をめぐるこれまでの調査・研究のうち代表的なものを取り上げた。特に犬山城への移築に関する議論が多くかわされていたことが理解できる。

しかし、天守の構造については、「金山越」の是非がクローズアップされたがあまり、金山城跡で確認されている遺構・遺物の整理が十分でないよううかがえる。そのこともあってか、天守の平面規模についても研究者によって異なっている。もちろん、検討するに足る資料が不足していた点も考慮しなければならないが、やはり金山城天守に関する情報の整理が不足していた感が否めない。

また、高田氏の指摘にもあるように、そもそも主郭東端部が天守か否かという疑問もある。天守の位置については、主郭東端部、北西隅、南西隅とする意見があり、東端部説が優勢ではあるものの、比定地が複数存在する。もし、東端以外の候補地を天守と認めるのであれば、犬山城天守との関係を一から考え直さねばならない事態に発展するかもしれない。

以上の点に鑑みれば、犬山城天守との比較を行う

にしても、金山城跡における「天守」の理解をより深める必要があると言えよう。したがって、次章から以下の順番で検討を進めたい。まずは現在までの金山城跡における「天守」についての研究の流れを踏まえ、金山城跡で確認できる遺構や遺物を分析し、建物構造や位置について整理する。その際、可見市教育委員会、可見市・滋賀県立大学による第1～9次調査の成果では、遺構・遺物ともに新たな知見が得られており、積極的に活用したい。発掘調査の成果を整理することで、現段階における最も蓋然性の高い金山城「天守」の姿が得られ、他遺跡の事例と比較する準備が整うと言える。その上で、犬山城天守との関係について考察を加えたい。ただ、犬山城天守の創建年代や「金山越」全般についての考察は、必要な作業量を考えると本稿では負いきれない。

よって本稿では、特に注目されている、金山城の天守を移築したか否かについて、これまでの調査成果や本稿の検討から言及できる部分に限定して考えてみたい。

## 2. 発掘調査成果からみた金山城跡の「天守」

### (1)主郭で実施された発掘調査の概要

金山城跡主郭部では、昭和41(1966)年度、平成18(2006)年度(第1次調査)、平成29(2017)年度～令和2(2020)年度(第6～第9次調査)にかけて発掘調査が実施されている。第1章第2項でも述べた通り、昭和40年代の段階で、主郭東端部に「天守」、枡形虎口付近に「穴蔵」を持つ「小天守」と「袖櫓」、主郭中央部に「本丸御殿」、主郭南西部に「南西隅櫓」といった施設の存在が既に想定されている(兼山町史蹟保存会編1973)。以降の発掘調査は、上記の想定を再検証する目的で行われたという側面もある。

第1次調査は、主郭中央部から主郭南西部にかけてを発掘対象とした(図2)。調査の結果、広範囲に渡って幅40～60cmの礎石が検出され、主郭に少なくとも礎石建物が二棟(=「本丸御殿」と「櫓」)存在した可能性が極めて高くなった。また、礎石建物の南側では、長さ16.8mの石組み溝が検出されており、軒先に落ちた水を排水する施設と想定される。なお、現地表面で確認される礎石の約20cm下から川原石の礎石が新たに確認された。上面の礎石建物は瀬戸美濃編年大窯4段階前半(天正末年頃)

以降に構築された可能性が高い(可見市教育委員会編2013)。

第6次～第9次調査は、主郭東部(I・II区)、枳形虎口(III区)、主郭南西部(IV区)、主郭北西部(V区)において発掘調査を実施した(図2)。調査の結果、第1次調査で確認された礎石建物の続きが発見されるとともに、I・II区では石敷き遺構、内側に面を向ける石垣(以下、内向き石垣と記載)が検出され、瓦が多量に出土した。III区では、昭和41年度の調査で確認された「穴蔵」の「土台石」が城機能時の整地土に伴わないことが判明し、I・II区の遺構に伴う礎石と新たに枳形虎口に伴う門の礎石が検出された。またV区では、礎石と石敷きを伴う築山状の高まりが検出されている。

このようにI区からV区で確認された遺構は、地山面上に遺構を構築した前期段階(大窯第3段階後半まで)と整地面上に礎石建物と石垣が構築された中期段階(大窯第4段階以降)、廃城となった後期段階(慶長6年前後)の計三段階が想定されている(可見市・滋賀県立大学編2021)。

以上、可見市教育委員会、可見市と滋賀県立大学が合同で行った一連の発掘調査により、主郭部の考古学的知見が蓄積された。特にI・II区で検出された内向き石垣は、礎石や柱穴こそ検出されなかったものの、「半地下構造を持つ天守台」として注目

された<sup>(4)</sup>。こうした調査成果に鑑み、『報告書』では、主郭東端部に「天守」、主郭中央部に「御殿」、主郭南西部に「櫓」を推定するに至ったのである(可見市・滋賀県立大学編2021)。

ただ、『報告書』では、調査成果の事実報告が中心となっており、「天守」を推定した経緯について詳述することができなかった。次項以降で、その経緯について順をおって検討したい。

## (2)主郭東端部に想定される施設の平面規模

本項では、経緯を説明する前段階として、主郭東端部に施設を推定するならばどれほどの規模となるか、その範囲の復元を試みたい(図8)。

主郭東端部では前述の通り、内向き石垣に伴う礎石や柱穴が検出されていない。もし、最初から礎石や柱穴が存在しなかったとした場合、残存している遺構で施設を支えられるのは、内向き石垣と主郭外周石垣(以下、外向き石垣と記載)の上面で形成される部分である(以下、石垣上面幅と呼称)。こうした点に鑑みて『報告書』では、石垣の高さ・石垣の勾配・隅部の位置から石垣上面幅を復元し、施設の平面規模を推定した。復元案の詳細については、『報告書』を参照されたい(可見市・滋賀県立大学編2021)。

復元を試みた結果、外側の辺の長さは東面約9.0m、西面約15.0m、南面約15.5m、北面約18.0mとなり、内側は東面約7.5m、西面約11.0m、南面約13.0m、北面約15.0mとなる。また、石垣上面幅は約1.0～2.5mであり、西辺を除く三辺を復元することができた。南辺の幅が他の二辺と比して狭くなってしまうものの、枳形虎口内の四基の礎石を含めれば、幅が約2.5mとなり(図8の網掛け部)、東側石垣上面と同規模の幅を確保できる。ちなみに、南辺を枳形虎口内の礎石の分長さを考慮すると、東面約10.0m、西面約16.0m、南面約13.0m、北面約14.0mの範囲に復元することができる。

また、第1章で既に述べているが、昭和41年度の調査で「穴蔵」の「土台石」が検出されていることを前提に、枳形虎口を「穴蔵」とする見解が根強く残っている。ただ、第7次調査の成果により、この「土台石」が後世の堆積土に伴うことが確認され、「石段」も同様の状況であることが明らかとなった(可見市・滋賀県立大学編2021)。現段階では、枳形虎口の大半を覆い隠すような施設を想定するのは難しいと言わざるを得ない。

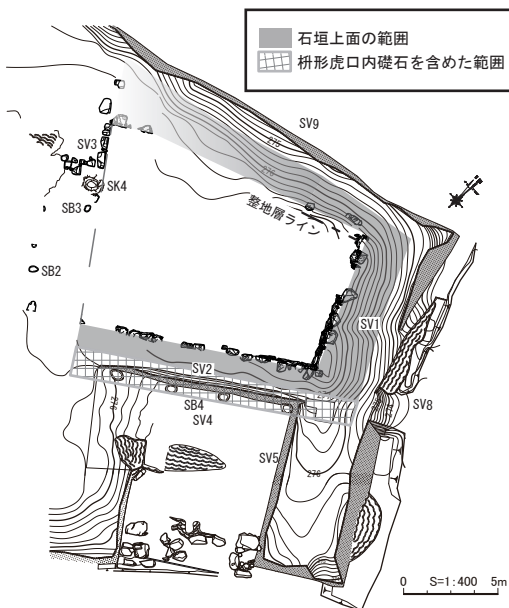


図8 主郭東端部に想定される施設の平面規模

表1 金山城跡における瓦の出土状況

場所		平瓦	丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	その他	総数	重さ (g)
主郭	I区	1,583	201	10	4	105	1,903	106,700
	II区	154	21	4	1	2	182	13,100
	III区	7	4	0	0	1	12	700
	IV区	6	0	0	0	1	7	800
	V区	0	0	0	0	0	0	0
	南側石垣	86	7	0	4	0	97	10,565
	その他	146	38	4	1	2	191	35,676
計	1,982	271	18	10	111	2,392	167,541	
東I	Dトレンチ	362	2	0	0	0	364	73,058
	その他	7	15	1	2	0	25	10,715
	計	369	17	1	2	0	389	83,773
	東II	20	10	0	0	0	30	1,410
	東III	1,386	134	1	0	0	1,521	197,491
	東IV	3,630	491	4	3	1	4,129	436,481
	東VI	204	22	0	0	0	226	48,500
	南I南腰曲輪	42	4	0	1	0	47	8,362
	南I西腰曲輪	37	10	0	1	0	48	6,126
	南II	2	0	0	0	0	2	607
	西I	22	5	1	0	0	28	5,198
	西II	10	2	0	0	0	12	1,861
	西III	1	0	0	0	0	1	226

(3)金山城跡における瓦の出土状況

「天守」を想定した経緯について、本項では瓦の出土状況から検討を試みたい。表1は金山城跡における過去の調査で出土した瓦の点数とその重量を示したものである<sup>(5)</sup>。出土地点ごとに数量を比較すると、多寡があることは一目瞭然であろう。

まず、主郭の状況であるが、最も出土点数が多いのはI区であり、数量・重量ともに主郭における出土点数・重量の大半を占める<sup>(6)</sup>。Dトレンチとは東I曲輪でSV8の裾に設定されたトレンチだが、当該曲輪の総量に比して圧倒的な点数が出土している。Dトレンチは主郭側の石垣裾から設定されており、出土した瓦はI区付近に存在した施設に伴うとみても良い。こうした点を鑑みれば、主郭東端部に何らかの瓦葺施設が存在したと考えるのが妥当であろう。また、『報告書』から出土している瓦のバリエーションを見ると、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦の他に輪違いとみられるものや器種は不明だが飾り瓦とみられる製品も確認できた。存在した施設は、石塁上の土塀等の比較的単純な構造ではなかっただろう。

東III曲輪では、数量こそ劣るものの、重量では主郭以上の量を認めることができる。東III曲輪では、虎口とそれに伴う門の遺構が確認されているため、門、もしくは虎口に伴う何らかの施設に葺かれていたと考えられる。

東IV曲輪は、数量、重量ともに最大の瓦出土地点である。東IVそのものは2.0×2.0m程度の狭い曲輪であるため、ここになんらかの瓦葺施設が存在したとは考えにくい。標高が上位の曲輪から葺かれていた瓦が流れ込んだというケースも考慮する必要はあるが、ひとまずはいずれか別の地点から運ばれて廃

棄されたと考えておきたい<sup>(7)</sup>。

曲輪単位でみて5番目の出土量を誇っているのは東VI曲輪である。東VI曲輪ではトレンチ調査で礎石列が確認されており、この礎石を用いた施設に瓦が葺かれていた可能性はある。

以上、城跡内で出土している瓦の数量の把握を試みた。今後の検討が必要な箇所も多いものの、少なくとも主郭東端部、東III曲輪虎口には瓦葺施設が存在したとみて良いだろう。金山城跡に瓦が葺かれたと考えられるのは、城郭に瓦が普及していく16世紀後半頃のことである。城全体の出土量からも比定できる通り、金山城跡に存在した施設の全てが瓦葺であったとは考えられない。限られた特別な施設のみが瓦葺だったとみるべきであろう<sup>(8)</sup>。

このような立場に立ったとき、主郭への通り道となる虎口の付属施設に並ぶ存在となる主郭東端部に想定される施設が、単なる石塁上の土塀などとはやはり考え難い。このことは軒瓦・平・丸瓦以外の器種が出土していることが傍証している。

(4)金山城廃城時の破却行為

次に金山城廃城時における、城内施設の破却行為

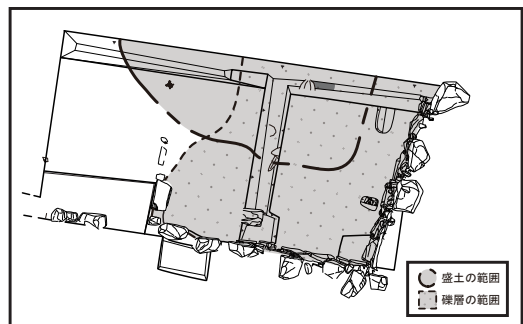


図9 主郭東端部整地面埋土堆積状況概略図



を見てみよう。Ⅰ・Ⅱ区で後期段階と評価している整地面埋土が、慶長6年(1601)前後の金山城廃城に伴う破却行為の一工程の可能性が高いことは、『報告書』において既に指摘している(可児市・滋賀県立大学編2021)。

この整地面埋土には、いくつかの単位が確認でき、Ⅰ区中央部から半円状に広がるように白色ブロック土を含む黄橙色土の盛土と礫層が堆積している(図9)。礫層は20~150mm大の礫が大半を占めているが、層中に築石を構成するような石材を見出せていない。

また、Ⅰ区北側において、北面の内向き石垣を構成したと考えられる石材が原位置を保っていない状況で検出され、その石材が動くのに連動する形で礫層が斜め下方向に流れるように堆積していることが明らかとなっている。このような点を踏まえると、石垣の破却は、礫層が堆積した後に行われたと想定される。

前述した点から石垣の破却は、まず外向き石垣を崩し、その後内向き石垣を下の曲輪に落としたと考えてよいだろう。東・南面の内向き石垣は、結果的にはあるが整地面埋土及び裏込めによって守られる形となり、外向き石垣と比して破却の影響は上

部のみと限定的である。ただ、北面の内向き石垣で原位置を保っているものは1石も残されておらず、外向き石垣も1、2石を残して崩されてしまっている。東・南面の外向き石垣の残存状況からみれば、念入りに破却を行っていると言え、山麓の城下町から視認できる位置を重点的に破却したものと考えられる。

この整地面を埋める行為は、城跡全体で普遍的にみられるわけではない。事実、主郭中央部、主郭南西部では表土を剥ぐとすぐに建物の礎石が検出され、場所によっては調査前から露頭している礎石も存在した(可児市教育委員会2013)。

また、石垣の破却度合いも石垣によってバラツキがあり、主郭東面など城内の動線上にある石垣よりも主郭北面のように遠方から見える部分を重点的に壊していると考えられる。これらの点は、廃城の際に全てを破却しているのではなく、重点的に破却すべき地点に労力を集中させた結果と捉えることができるだろう。

このような立場に立ったとき、主郭東端部で見られる破却行為はかなりの手間と労力をかけたものと言わざるを得ない。それだけ城内でも特異的な空間であったと考えるのが妥当であろう。

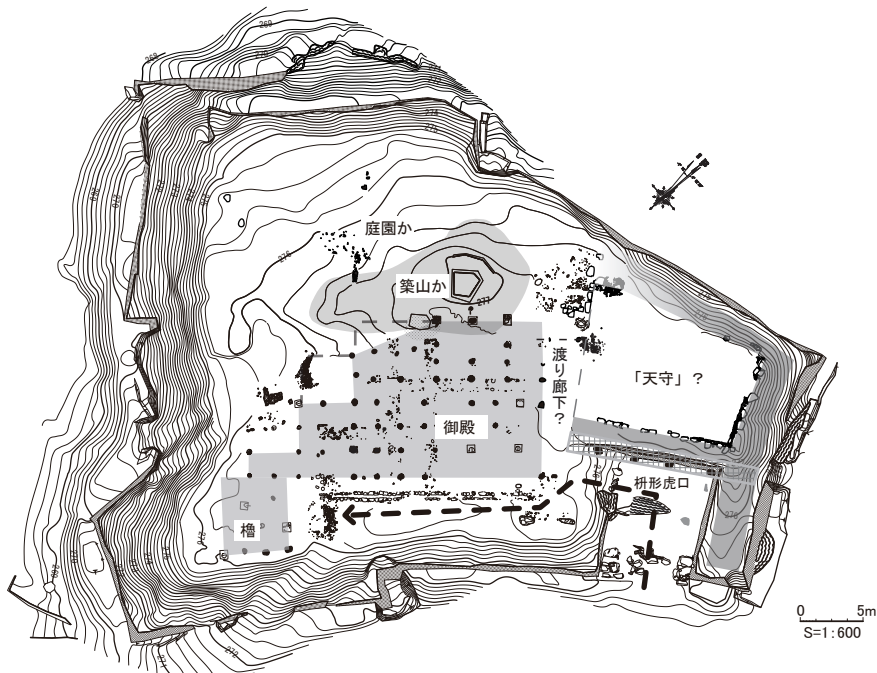


図10 金山城跡主郭の空間構成と想定される導線

(5)主郭の空間構成と想定される導線

最後に主郭の空間構成と想定される導線から、主郭東端部に想定される施設の位置づけについて考えてみよう。図10は主郭の空間構成を示したものである。以下、想定される導線に従って主郭の空間構成について整理しておきたい。

まず主郭へ進入するためには、東南部に位置する桁形虎口が唯一の出入り口となる<sup>9)</sup>。中央部には「御殿」が存在し、その南側には石組の排水溝があるため、主郭の南側を回り込む形で南西部の「櫓」に行き着くこととなる。なお、「櫓」の東側には、川原石の石敷き遺構が検出されており、「櫓」の入口が東側に存在した可能性がある。

「櫓」と「御殿」が別棟であったかどうかは不明であるが、遺構の検出状況に鑑みると、「櫓」から「御殿」へそのまま進入できるようになっていたと考える方が自然であろう。ちなみに「御殿」の北側には、川原石の石敷きを伴う築山状の高まりが見られることから、「庭園」が設けられていた可能性もある<sup>10)</sup>(図10)。

「御殿」の具体的な内部の状況についての復元は難しいが、主郭東端部付近まで礎石が検出されており、「御殿」の中を移動することは十分可能であっただろう。また、主郭東端部に想定される施設との繋がりについても明言できないものの、Ⅱ区で部分的に礎石が検出されていることから、渡り廊下のような施設が存在したかもしれない。

このように主郭の空間構成と導線を想定すると、結果として最後に行き着くのが主郭東端部に想定される施設となる。また、第2章第2項の検討を踏まえれば、「御殿」を除いて主郭で最大の施設が存在したと想定することができよう。

(6)小結

以上、「天守」を想定した経緯について、項目ごとに順をおって検討を行った。第6～9次調査によって、本丸東端部に半地下構造の施設の存在が明らかになり、その成果を基に平面規模を復元した。さらに瓦の出土傾向、破却行為、施設へ至る導線から、より深く施設の性格や位置づけを探ったところである。そして、城内全体を見渡しても現段階では数少ない瓦葺建物であること、他の調査区や曲輪では確認されていない丁寧な埋め戻し、そして導線上最奥の配置、そのいずれをとっても主郭東端部に確認された施設の重要性がうかがえた。

もちろん遺構の性格を評価する以前に、各研究者で異なる定義について斟酌しなければならない。そこで参考になるのは天守・天守台の用語と概念上の問題について整理した高田氏の論考(高田1998)<sup>11)</sup>である。高田氏の研究成果を踏まえ、本稿の検討結果を加味しても、主郭南西隅や北西隅と比較して、当該施設を「天守」とするのが現時点では穏当であろう。

3. 発掘調査成果からみた「金山越」

では、前章で行った検討内容を基に「金山越」の議論にどこまで迫ることができるのか。本章では、金山城跡並びに犬山城の調査成果を踏まえ、天守の移築に関する問題を取り上げたい。

第1章において述べた通り、天守移築を軸とする「金山越」を積極的に肯定する立場をとるのが横山氏と高木氏である(横山1979、高木2018、高木・飯田2020)。改めて筆者が説明するまでもないが、天守は近世の城郭における中心的な構築物である。「金山越」の是非はともかくとして、廃城となった城の天守の処遇について考えることは、城郭研究において決して小さな問題ではないだろう。

先行研究の章で示したように、天守移築を肯定す

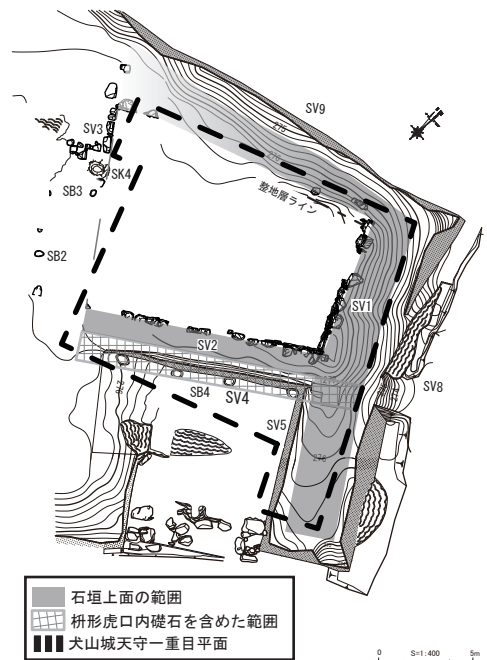


図11 金山城跡と犬山城の天守平面規模

る立場に対しては、城戸氏による反論がある(城戸1981)。ただ、移築を考える上で積極的な根拠となり得るものへの反証が十分ではない部分がある。それが、②天守の平面規模の比較、③・④金山城跡と犬山城で表採・出土した瓦の検討の2つである。以下、順を追って検討してみよう<sup>2)</sup>。

(1)天守の平面規模の比較

高木氏は、『金山城跡発掘調査報告書』(可見市教育委員会編2013)掲載の測量図を基に、主郭における石垣の「輪郭」を復元し、犬山城天守と重ね合わせている。そして両者が良く整合することをもって、移築の根拠の一つとしている。この検討方法は横山氏の視点を引き継いだものと言えるが、方形に近い天守平面とは異なり、不定形な天守平面が著しく一致しているのであれば、両者の強い関係を無視できない。ただし、高木氏の復元案は、主郭東端部の発掘調査が実施される前のものであるため、第6～第9次調査の成果を反映した復元図と比較する必要があるだろう。

図11は第2章で復元した、金山城跡「天守」の範囲と、犬山城天守の一重目平面図を重ね合わせたものである。両者を比較すると、その規模の違いは一目瞭然である。枡形虎口内の礎石を「天守」の建物が張り出したものと理解したとしても、犬山城天守の平面規模は一回り大きいのである。

また、両城を重ね合わせた際の犬山城天守付櫓に相当する枡形虎口東側石垣部分も見てみよう。図11に枡形虎口東側石垣の天端復元ラインを示しているが、こちらについても犬山城天守付櫓の幅の方が広いように見受けられる。いずれにせよ、仮に金山城跡主郭東端部に何らかの施設が存在したとしても、犬山城天守付櫓の方が一回り大きい規模となる。したがって、犬山城天守の一重目平面は金山城跡「天守」の平面規模とは一致しない。もちろん、建物が移築される際に平面規模や形状に変更が加えられる可能性は考えられなくはないだろう。しかし少なくとも、そのままの形を維持して天守を移動させたとは考えにくい。

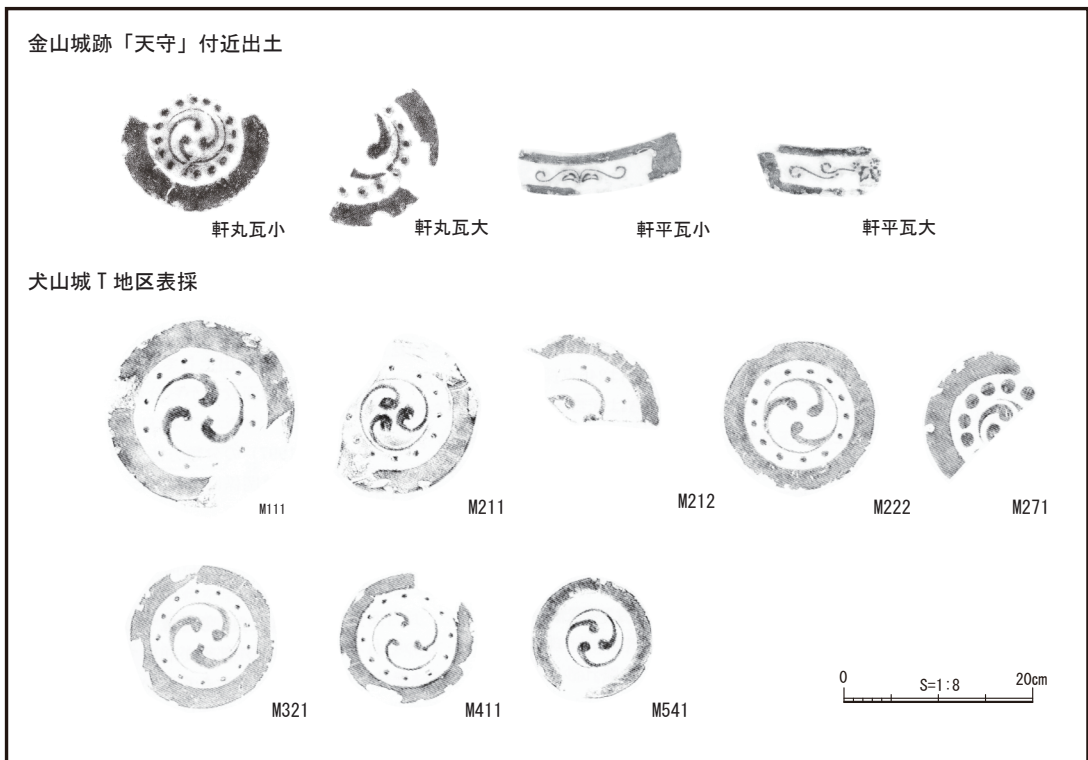


図12 金山城跡と犬山城で表採・出土した軒瓦の型式



## (2)金山城跡と犬山城で表採・出土した瓦の検討

横山氏は、金山城跡と犬山城で表採・出土した軒丸瓦の材質、焼成状況、文様が一致することを指摘し、移築説の根拠としている(横山1979)。

確かに、瓦の比較により建物の移動について想定するといった考え方は、考古学の方法論を用いた研究の中には数多く存在する。その中でも一般的な方法として、同範瓦の検討が挙げられよう。軒平瓦や軒丸瓦は、基本的に範と呼ばれる型を用いて文様を造形するため、型式学的な分類を進めれば、同じ範で製作された瓦群(同範瓦)を見出すことができる。このようにして見出された同範瓦は、生産地の特定や遺跡間での瓦の移動などを考える上で、重要な情報として用いられるのである<sup>13)</sup>。ちなみに、遺跡間での瓦の移動について論証した近年の事例として、大溝城跡(滋賀県高島市)と矢川寺遺跡(滋賀県甲賀市)から水口岡山城跡(滋賀県甲賀市)への瓦の移動を明らかにした小谷徳彦氏の研究が挙げられる(小谷2018)。

したがって、金山城跡と犬山城で同範の瓦を確認できれば、瓦の移動から天守の移動についても傍証できる可能性があると言えよう。

両城で確認されている瓦のうち、天守に葺かれていた可能性の高い型式を並べたのが図12である。このうち、金山城跡の事例として挙げているのは、第6～第9次調査のⅠ・Ⅱ区や、東Ⅰ曲輪の発掘調査(第2次調査)で出土しているものである。一方、犬山城の事例として挙げているのは、犬山市が平成21年度に実施した発掘調査で、天守の北側・西側に設定されてT地区で表採されている一群である(犬山市教育委員会編2017)。

まず軒平瓦について、『犬山城跡総合調査報告書』では、T地区で採集された軒平瓦の種類について明言されていない。そのため、同範の製品の有無は不明である<sup>14)</sup>。一方、軒丸瓦に目を向けると、どちらも巴文をあしらった製品が主流であることが分かる。ただし、細部を比べると、珠文の数や間隔、巴の形状等がいずれも完全に一致する製品は存在しない。

つまり、金山城跡と犬山城跡では、現在のところ、同じ範で生産された製品は見つかっていない、ということになる。よって現段階においては、瓦から天守の移動を傍証しがたい。

また横山氏、高木氏は、金山城跡と犬山城跡で桐

文瓦が出土していることも移築説の根拠としている。ただし、犬山城跡で出土しているのは、屋根の棟に埋め込む菊丸瓦であり、金山城跡で出土しているのは、屋根の軒先に葺く、軒平瓦である。つまり、両城で出土している桐紋瓦は種類が全く異なるのである。器種の違う瓦をもって移築を傍証する根拠とするのは難しい。

## (3)小結

以上、横山氏、高木氏が提示した根拠の中で、天守の移動を積極的に傍証する可能性がある事項に絞って個別に検討した。その結果、金山城跡「天守」と犬山城天守の平面形は一致せず、同範瓦は確認できなかった。積極的に天守の移動を証明する根拠は現時点で見出し難い。もちろん、両城での調査が進めば、同範の瓦が出土する可能性はあり、部材単位での移動が確認されるかもしれない。ただし、天守の平面形の相違を踏まえれば、少なくとも、現段階で金山城に存在したであろう「天守」をそのまま犬山城へ移築したとは認定しがたい。

## おわりに

以上、主郭で行われた発掘調査成果の整理を行い、金山城跡の「天守」について再検討を試みた。城内全体を見渡しても現段階では数少ない瓦葺建物であること、他の調査区や曲輪では確認されていない丁寧な埋め戻し、そして導線上最奥となる点等を加味すれば、「天守」の位置を主郭東端部に求めるのが妥当である。また、上記に加え、「天守」の平面規模を主郭と枳形虎口の発掘調査成果を用いて復元した。金山城跡における「天守」について、現段階における最も蓋然性の高い水準で、その構造や位置づけに係わる情報を提示できたのではないだろうか。

また、第2章の成果を基に、天守の移築に関する問題について検討を行った。現段階における発掘調査成果を踏まえれば、少なくとも「天守」をそのまま犬山城へ移築したことを示す積極的な根拠を見出すことはできなかった。中井氏が『報告書』上で、天守をそのまま移築したとは考えにくいとの見解を示したのはこのためである。

ただ、誤解の無いように付言しておく、本稿で行った検討は、金山城から犬山城への建築部材が移動した、いわゆる広義の「金山越」を否定するものではない。西氏、城戸氏、高田氏が既に指摘するよ

うに(西1977、城戸1981、高田1993)、犬山城に金山城跡から移築された伝承を持つ建築物が数多く存在する点に鑑みれば、両城が浅からぬ関係にあったと考えるのは至極妥当なことと言える。「金山越」の是非は、天守移築説の是非のみで語られるべきではないこともあわせて付け加えておきたい。

また、本稿では、犬山城の史資料を用いた検討は、ほとんど行っていない。それは必要な作業量の多さ、そして筆者らの知見不足によるものである。近年では、麓和善氏と光谷拓実氏が、犬山城天守部材の年輪年代と部材の加工方法などの調査成果より、天正12(1584)年から天正18(1590)年の間に一重目から三重目までが一連で建築されたとの見解を示している(麓編2021)。また、天守以外の部分も含めて、犬山城をめぐる調査・研究が進展している(犬山市教育委員会2017、文化財建造物保存技術会編2020)。

このような成果が、「金山越」の議論にどのように影響するかについて、本稿での言及は差し控えた。ただ、犬山城そしてもちろん金山城跡に関する知見が今後さらに増加していくのは間違いないだろう。筆者らもこうした調査・研究成果に注目しつつ、ますます多方面から「天守」と「金山越」をはじめとする金山城跡の研究が進展することを期待したい。

## 謝辞

本稿作成に際して、多くの方々からご教示、ご協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。上田直弥、榎木規秀、北畠俊、金宇大、小谷徳彦、高田徹、高野航太郎、戸塚和美、中井均、長江真和、中久保辰夫、堀寛之、松井一明、村上慶介、山口誠司

令和3年2月6日(土)に考古学研究会関西例会、令和3年4月10日(土)に城郭談話会4月例会において「国史跡美濃金山城跡の発掘調査―主郭部の調査成果を中心に―」と題して報告させていただいた。その場で多くのご意見を賜ったことも本稿をまとめる上で大いに役立った。発表の場を与えていただいた考古学研究会関西例会、城郭談話会の皆さまに感謝申し上げたい。

## 【注】

- (1)本稿では、あくまで名詞として用いる場合は「 」を外している。また、研究者ないし筆者らの解釈として用いる場合は「 」をつけている。あらかじめご了承ください。
- (2)城戸氏は、①柱・貫の番付が2種類以上なければならぬところ1種類しかないこと、②旧釘穴が最低でも2ヶ所あるはずのところ1ヶ所しかないこと。③組手・仕口または柄などに解体した形跡、痕跡がみられないこと。④貫などのように寸法が同じものが入り混じらず、番付通りに収まっていたこと。⑤部材の取り換えを行った形跡がみられないこと。の5点をもって、犬山城への移築を否定している。
- (3)加藤理文氏も詳説はしていないものの、高田氏と同じく主郭南西隅に天守を想定する見解を示している(加藤2015)。
- (4)こうした見解は、『報告書』刊行の前で既に示している(滋賀県立大学考古学研究室2018、長江2020、柴田2021)
- (5)おおむね、瓦の総数量の多い地点ほど、総重量も多くなる傾向がうかがえる。異なる2つのパラメーターが比例の関係にあるため、数量・重量の大きい地点ほど、個体数も多かったとみてよい。もちろん調査区の面積や掘削深度は一律ではないが、おおよその傾向を掴む分には有効な指標であろう。

- (6)主郭では南側外周石垣でも一定量の瓦が確認されることも注意すべきである。これは、第1～第5次調査の段階で石垣立面図を作成する際に、石垣前面の表土から採集されたものである。そのため、実態としてはさらに多くの瓦が廃棄されている可能性がある。また表には示していないが、主郭南側外周石垣に概ね併行する石組み溝が検出されており、瓦が41点出土している。こうした点に鑑みると、主郭南側にも瓦葺建物が存在した可能性がある。
- (7)松井一明氏も金山城跡の瓦集中地点の検討を行っており、同様の見解を示している(松井2017)。
- (8)このような視点で見れば、高田氏が天守を想定した主郭南西隅の「櫓」や中央部の「御殿」ですらも瓦を用いなかった可能性が高い。松井氏が既に指摘しているが、金山城跡は城内の建物が瓦葺か否か識別できる1つのモデルケースとなり得る可能性がある(松井2017)。
- (9)現況では主郭西側部分にやや凹んでいる箇所が存在するが、第7次調査において遺構が検出されず、少なくとも虎口でないことが確認されている。
- (10)現況地形を見ると、築山状の高まりから北側は北西の方向に緩やかに傾斜している。V区の発掘調査成果を踏まえると、金山城機能時も同様の状況であったと考えられる。また、間に築山状の高まりを介することになるため、主郭にある他の施設との繋がり不明である。主郭北西部に具体的にどのような施設が存在したかについては、今後の課題であろう。
- (11)高田氏は、例外もあり得るとした上で、①主郭に相当する曲輪。②城内の最高所。③曲輪の墨線上であることが多い。④曲輪との間に連絡路を有し、入口部分に穴蔵を伴う場合がある。⑤礎石・瓦・石垣を用いる。⑥平面形態は方形に準じる。⑦曲輪面からの比高差を有する。⑧城内で最大の櫓台。と天守台の概念を整理している。
- (12)天守の平面規模の比較、瓦の検討とは異なり、積極的な根拠として用いているわけではないが、天守移築説の議論の出発点が諸史料であるのは間違いないと思われる。したがって、ここでも文献史料についても触れておきたい。横山氏は「文献からみた限りでは、それぞれ大同小異はあるが、慶長五六年頃に天守以下ほとんどの建物が金山城から犬山城へ移されたもので、天守は移築ではない

とするとこの頃新築されたものと見なければならぬことになる」と反証的に天守移築の根拠に用いている(横山1979)。ただし、横山氏が文中でまとめているように、「金山越」に関して年代的に最も遡る文献である『正事記』は寛文5(1665)年頃に成立したものであり、金山城の廃城から50年以上の懸隔がある。他の同時代史料や考古資料の傍証が無ければ、そのまま史実として受け入れることはためらわれる。

- (13)同範瓦を媒介とした製品の移動に関する議論については、上原真人氏が詳しくまとめている(上原1997)。そして上原氏の議論は近江俊秀氏が平易にまとめている(近江2018)。両氏によると、同範の瓦が異なる寺院から出土した場合、以下の3通りが考えられるという。すなわち①A寺とB寺へ同じ瓦窯から供給された場合②A寺からB寺へ製品が持ち込まれた場合③A寺で使わなくなった範をB寺へ持ち込み生産した場合である。近江氏は古代寺院についての議論を進めるために、このような例示となっているが、「寺」を「城」に入れ替えて論理を用いることも可能である。その場合、金山越のように城から城への瓦の移動は、②のパターンである。もちろん、瓦を生産していた瓦窯の検出事例が少ない織豊期では、必ずしも古代寺院の検討方法をそのまま用いることはできないことも多いが、それでも有効な視点と言える。
- (14)ただし、『犬山城跡総合調査報告書』で掲載されている、犬山城跡出土・採集軒平瓦すべてに目を向けたとしても、同様の文様構成を持つものが認められない。同じ範で生産された製品が無いことは一目でわかる。

#### 図・表の出典

- (図1)筆者作成  
 (図2)可見市教育委員会2019掲載図を一部改変  
 (図3)土屋・城戸1937掲載図を一部改変  
 (図4)根津1967掲載図を転載  
 (図5)兼山町史蹟保存会編1973掲載図を転載  
 (図6)横山1979掲載図を一部改変  
 (図7)高木2018掲載図を一部改変  
 (図8)可見市・滋賀県立大学編2021掲載図を一部改変  
 (図9)可見市・滋賀県立大学編2021掲載図を一部改変



(図10)筆者作成

(図11)筆者作成

(図12)犬山市教育委員会編2017、可見市教育委員会編2013、可見市・滋賀県立大学編2021  
掲載図を一部改変

(表1)筆者作成

#### 参考文献

- ・犬山市教育委員会2017『犬山城総合調査報告書』
- ・上原真人1997『瓦を読む』、講談社
- ・近江俊秀2018『入門 歴史時代の考古学』、同成社
- ・加藤理文2015「天守台を持たない天守」『織豊城郭』第15号、織豊期城郭研究会
- ・兼山町史蹟保存会編1973『史蹟 美濃金山城址』
- ・可見市教育委員会編2013『金山城跡発掘調査報告書』
- ・可見市教育委員会編2019『国史跡美濃金山城跡整備基本計画』
- ・可見市・滋賀県立大学編2021『国史跡美濃金山城跡主郭発掘調査報告書』
- ・城戸久1965『国宝犬山城』、名古屋鉄道
- ・城戸久1981「犬山城と天守の建築」『名古屋城と天守建築』、名著出版
- ・滋賀県立大学考古学研究室2018「美濃金山城跡の発掘調査」『織豊城郭』第18号、織豊期城郭研究会
- ・柴田慎平2021「国史跡美濃金山城跡の発掘調査―主郭部の調査成果を中心に―」『考古学研究会関西例会第223回研究会、城郭談話会令和3年度4月例会当日配布レジュメ』
- ・国宝犬山城天守修理委員会編1965『国宝犬山城天守修理工事報告書』
- ・小谷徳彦2018「発掘調査の成果から見た水口岡山城」『織豊城郭』第18号、織豊期城郭研究会
- ・高木鋼太郎2018『犬山城創建の謎を検証する 金山越(美濃金山城移築説)の真相に迫る』
- ・高木鋼太郎・飯田好晴2020「犬山城移築説(金山越)の真相に迫る」『各務原歴史研究会 20周年記念誌かかみ』、各務原歴史研究会
- ・高田徹1993「森氏の美濃支配と城郭」『中世城郭研究』第7号、中世城郭研究会
- ・高田徹1998「天守台研究をめぐる諸問題―特に用語・概念上の問題を中心として―」『織豊城郭』第5号、織豊期城郭研究会
- ・土屋純一・城戸久1937「尾張犬山城主天守建築考」『建築学会論文集』第5号、日本建築学会
- ・鳥羽正雄ほか編1967『日本城郭全集』第7巻、新人物往来社
- ・長江真和2020「美濃金山城跡発掘調査報告」『岐阜県新発見考古速報2020―令和2年度岐阜県発掘調査報告会発表資料―』、岐阜県文化財保護センター
- ・根津袈津之1967『金山城天守記』、兼山町教育委員会
- ・麓和善編2021『国宝犬山城天守の創建に関する新発見(従来の定説を覆す調査結果報告)』、犬山市
- ・文化財建造物保存技術協会編2020『国宝犬山城天守保存修理工事報告書』
- ・松井一明2017「25遺物からみた織豊系城郭」『織豊系城郭とは何か―その成果と課題―(村田修三監修、城郭談話会編)』、サンライズ出版
- ・横山住雄1979『国宝犬山城と城下町』、犬山城史研究会